【国東市長賞】

私たちの今や将来に関わる税

国東市立志成学園　九年　水元　絢音

七百一年、当時の中国、唐からならった、大宝律令で、租・庸・調という税の仕組みが整えられた。それから約千三百年、今現在も国民は「税金」を納めている。

集められた税金は何に使われているのか？私の頭の中に浮かんだのは、社会保障のため、自衛隊などの防衛費など、中学生の私にとってあまり関係のないものだなと思っていた。

しかし、詳しく調べてみると、校舎や体育館などの施設の建設、教科書代、ボールや跳び箱などの道具代としても税金が使われていた。それだけでなく、医療費や高齢者の介護や年金、災害復旧や感染症の対策にも税金が使われていた。私の生活は、知らず知らずのうちに「税金」によって支えられていた。

もし、税金の制度が日本に存在しなかったらどんな日常になっていただろうか。小・中学校では、四月に当たり前のように配布される新品の教科書。税金がなければ、教科書代は親が全額負担しなければならない。教科書だけでなく、学校での電気代、水道代、イスや机の代金も支払わなくてはならない。すると、教育が充分に受けられない子どもが少なからず出てくるだろう。

また、医療費についてのサポートがなければ、入院したくても、お金がなくて入院できない人、治療に必要な薬が飲めずに、症状が悪化する人が増えるはずだ。税制度がないと、救急車が有料になってしまうという話も耳にしたことがある。

私は最初、何のために税金があるのだろうか？消費税は０％で良いではないか。とずっと考えていた。しかし、学校での授業や今回の調べ学習で、税制度が世の中にとってなくてはならないものだと身に染みて感じた。他人事ではないなと思った。

そんな税には、私たち中学生にも今後関わってくる大きな問題がある。社会科の公民の授業で、今後の現役世代の年金負担額はだんだん大きくなっていくと学習した。二〇一〇年、高齢者一人分の基礎年金は、二・六人の現役世代によって支えられたというデータがある。それが二〇五〇年には、高齢者一人分を一・二人の現役世代で支えるようになると予想されている。その原因は、少子高齢化だ。年金を求める高齢者は増える一方、年金負担をする現役世代の人数は減っていく。このままだと、年金制度自体がなくなってしまうのではないだろうか。負担の増加と社会保障の充実の両立が、今後の大きな課題である。

この課題について、いちばん知るべきなのは、私たち中学生である。数年後は社会人の仲間入りをし、支えられてきた立場から社会を支える立場となる。税についての知識や課題を学習し、理解することが必要となる。

税は、私たち中学生の現在や将来に大きく関わるものなのだ。